

佑啓

ゆ う け い

発 行 者

社会福祉法人 佑啓会

理事長 里見 吉英

〒290-0265

千葉県市原市今富 1110-1

TEL 0436-36-7611

FAX 0436-36-7612

編集者 広報委員会

目は瞑らない

里見 吉英

三月一日。年度末の繁忙期を迎えている。近年は就職活動の解禁日でもあり、もう再来年度採用の対応に追われている。学生の売り手市場と言われる昨今、この福祉業界は人材確保にかなりの苦戦を強いられている。良い人材を獲得しようと様々な手法を講じているが、メディア等の歪曲されたネガティブイメージにより、なかなか人が集まらない。今は協会をあげてもキャンペーンを展開しているが、なかなか効果は目に見えない。そんな中、追い打ちをかけるような事件が昨年起きてしまった。

神奈川の津久井やまゆり園での痛ましい殺傷事件。戦後最悪の大量殺人事件という衝撃とともに、犠牲となったのが障害者であり現場が生活の場である入所施設であったことに関係者として驚愕した。関係機関からの情報を得ながらいろいろ考察していると、あの事件は特殊ケースだと収束してしまうのは簡単だが、背景にはさまざまな課題が見えてくる。

まず、障害者に対する理解のない人間が世の中にはいるということが表面化した。「生産性のない人

間は生きていく価値はない」という思想。例えば自閉の方の行動を見て我々は、あれは自閉症の特徴、表現、自己主張と捉えることができる。ところが障害を受け入れられない人というのは、あれは我儘だ、わかって悪いことをしている、だから殴らないとわからない、そういう考えになってしまふ。そういうところまで採用面接だけでは見抜けないこともあるが、大体二ヶ月三か月でわかってくる。そこで研修や個別で丁寧に説明をするがやはり理解できない。結局仕事を任せられない。そういう人には別の業種に向かってもらうしかないのだが、この事件の背景には、そういう価値観の人が非常勤から正職員に登用されて三年間も働いていたというところに大きな過ちがある。要は三年間、上司も同僚も見過ごしてしまった。組織のガバナンスが欠けていたと言わざるを得ない。報道によれば全身刺青を入れていたというが、お風呂介助などどうしていたんだろう。多分、普段から利用者への支援も酷かったのではないか。その期間どれだけあの犯人の被害にあった利

用者がいたかと思うと居たたまれなくなる。その一点においては施設としての責任はあった。

しかし、その他の点については最善の手は尽くされていたと思う。衆議院議長へ予告の手紙を書くなどのサインを受けて施設も一生懸命対応していた。防犯カメラを付けたら、警備員まで配置した。なぜそこまで出来たかという県立施設ということで職員も厚く配置できているというのもある。それでも用意周到な元職員の犯行は防げなかった。ではこれが我々民間法人だとどこまでできたかどうか。もしも危険を察知しても、警察、市や県に相談して、結局、職員の中でやり繰りするしかない。



この事件を機に国は緊急で補助金を出した。私共の法人も防犯カメラを各施設に導入したが、我々にできることと言ったらそれくらいしかない。

またこの事件から飛び火して追い込まれている人たちがいる。犯人がパーソナル障害と公表されている精神障害の方たち。以前発生した池田小殺傷事件でも、犯人の病歴によって精神障害の方々は影響を受け、例えばグループホーム建設が決まっていたのに、反対運動により計画が頓挫したケースが

全国各地で発生した。今回も同様に、色眼鏡で見られている。



事件後程なくして県知事から建替え案が出た。確かに、あの様な事件が起きたままのところで生活するというのは考えられないと思う。ところが事件を風化させないために同じ場所で建て替えるという考えには疑問を呈さざるを得ない。事件を風化させないためとはいいが、そこで生活する人がどんな思いをするか考えているのだろうか。風化させないためだったらその建物だけを残せば良い話で、他の場所を見つけて建て替えた方がよいだろう。

しかしいざ施設を移転、建て替えとなるとそれはそれで難しさがあるのもまた事実である。反対運動が起きるかもしれない。それでも同じ場所で生活する、仕事をするとするのはどうしても疑問が残る。またこの際だから入所施設を解体してグループホームで地域に移そうと提唱されている団体もある。ご家族はどう思うだろうか。

また驚くのは建て替え費用。一三〇人の施設で費用が六〇億から八〇億と報道されている。一人頭で計算したら五〇〇〇万円

から七〇〇万円にもなる。逆算すると一般家庭の生活空間、例えばマンションとか一戸建てとか、四人家族だとすると二億円から三億円も費やすということ。障害者は今でも総論賛成、各論反対、潜在的な市民感情は複雑である。あのような悲惨な事件があった障害者施設だから、税金による建て替えも止む無しと一般的には思っている。だから口には出さない。

ところが六〇億からの税金を使うとなると「障害者はいいねえ、億ションだよ」と。特別扱い、特別な存在にしようとする受け入れられなくなってしまうのではないか。私は建て替えるのなら消し去るような施設を建てて生活したらどうか。ちなみに今、入所施設やグループホームなどの居住施設は大体一人一〇〇万円ほど。グループホーム一軒で約四〇〇〇万円。通所施設はだいたい一人五〇〇万円位が妥当な金額ではないかと考えている。

県立施設だから知事的一声で莫大な予算が飛び出すわけで、今回のケースが民間施設だったら建て替えるも叶わず、他の施設に分散して閉鎖するしかないのではないか。この税金との関連や社会福祉法人の財政状況などについて、間もなく施行される改正社会福祉法における社会福祉法人改革において思うところがあるが、紙面の都合上次回に譲る。

最後に今回の事件で思うところをもう一つ。これは責めているわけではないが、亡くなられた方々の氏名が公表されなかったこと。半数の親御さんの反対があっ

たという事実はあるが、私たちにとつては非常に悲しいことでもある。施設に入っても、彼らは一生懸命生きている。何も隠すことはない。ご家族も高齢の方たちであったのでそういう考えもあったかと思うが、やはり我々としては公表してほしかったというのが本音である。

障害者だから「ダメなんだ」いや障害者だから「もつと助けてあげなきゃ」差別は断じて許さないが、過剰な配慮は逆差別を生んでしまう。結局、障害者を特別な存在にしないことでしかその差は埋まらない。社会への啓発活動、地域住民との良好な関係づくり、職員への研修、そんなことを積み重ねていくことが我々の使命であり、それを日々実践しているのは現場で働く職員である。



職員は単なる人手ではなく、「人ザイ」である。巷間には「人財・人材・人在・人罪」と定義があるが、私にとって職員は「人財」である。

間もなく春、新年度には多くの若者がやってくる。人罪にするか人財に育てるか、責任は重大である。

(佑啓会 理事長)

おやじの会結成

安林 克之



「おやじの会」について「佑啓」に載せるということで依頼がありました。

さて、困った、困った。おやじの会という組織化されたものもないし当然理念もポリシーもまだない。何もないだらけの状態だが、待望の新施設が決まりおやじの中でも大いに盛り上がりつつある。少しでもふる里学舎にお役に立ちたい心境である。今回はまだ何も進んでいないが現状だけでも書かせていただきます。

まず、この「おやじの会」の発端は昨年六月の利用者家族一泊旅行及び十月の家族会一泊研修会の食事会の時に里見理事長が来られ、八千代の父親と語り合いたいと話されたのが発端です。二度もお話を受けながら私の怠慢で遅々として今日に至った訳ですが・・・

まずは我々保護者の父親相互の面識、理解を深めることから始めようと、数人の父親と話し合い、先ずは「父親親睦会」と銘うち一同に会する事にしました「親睦会」参加を募るため保護者総名簿、五十六名から母子家庭の方、十八名を除く三十八

名の父親宛てに参加要請書を発送しましたが、結局十名の参加数に留まりました。十一月十二日作業所にての親睦会にて、自己紹介、又これから本格的にお世話になるふる里学舎への期待等話を話し合いの後、今後この会の名称を「おやじの会」とする事に決定しました。



一方、今まで我々父親は、我が子の養育を母親任せにしてきた感が否めません。これからは、ふる里学舎という支援のグループに我が子を委ねる訳ですがふる里学舎の様々な行動指針を学び、知り、父親としての立場から出来る事、そして又やらねばならない事を基に考え、行動せねばならないと思います。

早いもので、福祉作業所もこの三月で「NPO法人手をつなぐ親の会」から「社会福祉法人佑啓会」に運営が代わり二年が経過しようとしています。この二年、福祉作業所という現場を見るに、今まで以上に規律、そして心配りが感じられます。よく、一貫性を表す言葉で「金太郎飴」の如しとありますが特に最近、何処を切っても「金太郎」の顔が感じられるのは私だけでしょうか。

永年、念願の福祉作業所建て替えも平成三十年春には完成が予定され、今後ともふる里学舎の一員として、心身共に一体化し

て「明るく・元気に・さわやかに・そして品よく」邁進したいと思えます。今後ともよろしくお願ひ致します。
『何事も信頼、勿論相互に』

(八千代市福祉作業所保護者)

スキー三昧 in カナダ

高橋 繁

昨年4月1日法人全体で400名以上の方が杜のホールに集まり辞令交付式が行われた。例年新人職員の初々しさを目にして新たな気持ちにさせてくれる特別な日だ。この日も緊張している新人をみて初心を忘れずに頑張ろうと思っていた。式の終盤にまさかの出来事が・・・「高橋君 中川君前に来てください」と里見理事長に言われ、次の瞬間「海外でもどこでも好きなところについてきなさい」とのお言葉が・・・夢のようだった。

遡ると私は15年前に調理員としてふる里学舎和田浦に採用して頂いた。支援員のように直接利用者さんと関わることは少ないが、食事作りを通して日々利用者さんと間接的に関わらせていただいていた。食べることは人間としてとても重要なことであり、また楽しみである。そのような業務に携わらせてもらいとても感謝している。

さて海外旅行に行くのは人生2回目1回目もふる里学舎に入社して4年目の職員旅行で行ったサイパンだった。入社以来毎年様々な場所で社会勉強をさ

せて頂いている。今回一緒に行く同期の中川支援員と行先を検討した結果、二人の共通の趣味であるスキー・スノーボードの出来るカナダに行くことにした。しかし私は少し不安があった。私も中川支援員もほとんど英語が出来ないのである。それでもお互い前向きな性格が取り柄でハイテクな時代だから何とかなんとかなろうと話していた。何も考えてないだけかも知れないが。

成田空港から飛行機に7時間乗り、カナダに到着。無事入国を済ませ、ホテルで次の日の初滑りに備えゆつくりと休んだ。翌日いよいよ待望のカナダのウィスラー初滑りであり、まずはガイドにコースを案内してもらい、色々なコースを回ったがとても広大で、コースの数も多くマップがないと遭難しそうだ。余談だがウィスラーでも十数年に一度の大雪だったらしい、一晩で60cmも積もる豪雪国は世界でも珍しいこの事だった。

まずゴンドラに乗ると目の前には今まで見たことのない絶景が広がっていた。このまますつと乗っていたい気持ちであった。ゴンドラから降りるとリフトの代わりにTバーという物があり、T字のバーに掴まり滑りながらグレンデの上まで行くのだ。自分にはバランス感覚が無いのか扱いが難しく、乗るときに転倒してしまい、何とか乗れたと思っ

たらバランスを取るのが難しく結局途中で落ちてしまった。皆が見ている前でとても恥ずかしい思いをした。初めての経験というものは、恥じらいが付き物である。私も調理業務で初めはミスの連続で上司に怒られ恥ずかしい思いばかりしていた。スキーのように何度転んでも何度

も起き上がりを繰り返してきたように思う。

川支援員と一気に競争しながら滑った。彼とは職種は異なるが共に15年間切磋琢磨してきた仲間だ。同期は何年経っても新人の頃の気持ちで接することができる。とても貴重な存在である。三日目以降も天候に恵まれ、とても気持ちよくなった。頂上付近の標高は日本の雪山とそこまで変わらない高さのはずなのに、あの空の近さと吸い込まれるような広さは圧巻だった。あ

のような感覚は実際行ってみて体験しないとわからない感覚だと思った。



調理員としてやはり気になるのが食事である。KAGというレストランではさすが海外という料理が出た。前菜からサラダがレタス四分の一がカットされたままの姿でそこにドレッシングやらスモークサーモンのフレークなどが掛かっているという豪快な感じであった。メインもとても大きなローストビーフが出てきて、サラダからの料理を考えるととても食べられる量ではなかった。あとで聞いた話だがカナダはテイクアウト習慣があるらしく食べきれないときは、持ち帰り食べるとの事だった。日本のようにカローリや食事を気にしている人は皆無である。日本とは文化が違うカナダ特有

の文化であったが、その空間は皆、楽しそうに笑顔で食事をしていたのが印象的であった。大切なのはその状況下でいかに楽しく過ごすかであると感じた。



スキー・スノーボード・食事とカナダを満喫しとても楽しく過ごすことができた。しかし最初にも話したがほとんど英語が話せない、食事の時やホテルなどでの自分のコミュニケーションスキルの無さには絶望した。軽い会話が出来くるくらい身に着けていればもう少し異文化交流も出来さらに楽しく過ごせたのだろうと思った。

この海外旅行で元気を蓄えさせていただき感謝の気持ちでいっぱいである。またこれからも利用者・職員が笑顔になる温かい食事を作っていきたい。(ふる里学舎千倉 調理員)

✽編集後記✽

「寒暖差が激しいので体調管理には十分注意してください」毎日のように利用者さんにお伝えしている日々・・・今年の特徴としては寒暖差が激しいと感じているのは私だけでしょうか。そんな毎日ですが、八千代市福祉作業所の桜のつぼみも膨らんで少しずつ春の訪れを感じようになりました。春の香りとともにに佑啓九十九号を皆様へお届けいたします。

田崎 悟